

心の家

令和4年夏号

ヒマワリ
(和名・向日葵)

花言葉

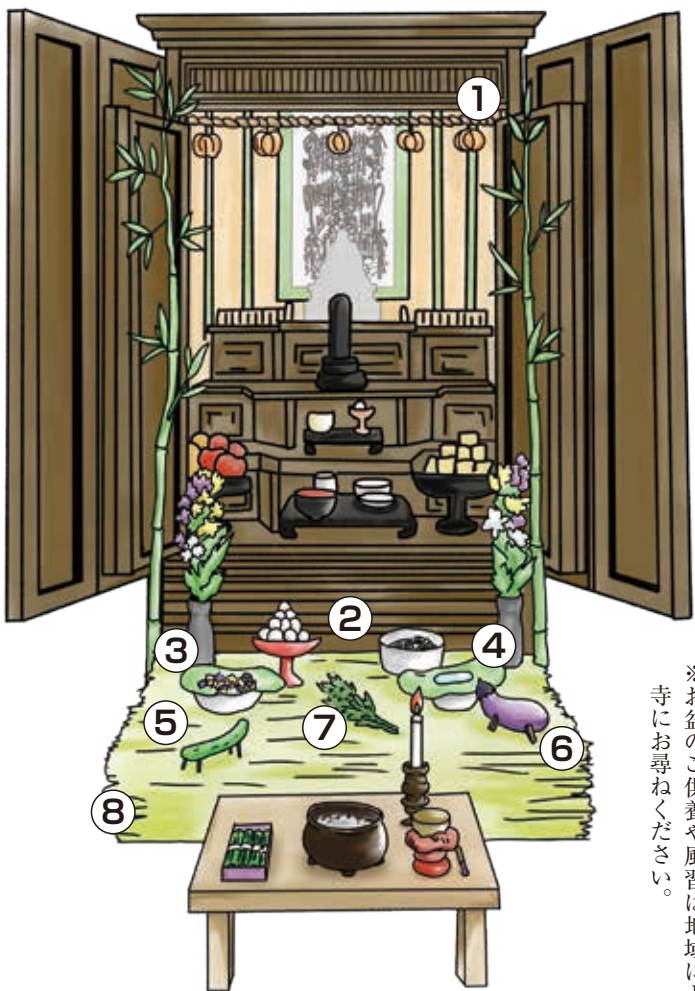
私はあなただけを見つめる
愛慕、崇拜

宗華法本顯

盆棚（精霊棚）の飾り方

お盆期間中は、普段にも増してご先祖様や新盆の霊位に感謝の気持ちを捧げるために、お仏壇の前に盆棚（あるいは精霊棚）という特別な祭壇をおつくりする地域があります。左のイラストを参考に、各ご家庭にてできる限りのお飾りを行ってみてください。

※お盆のご供養や風習は地域によって異なりますので、詳細は菩提寺にお尋ねください。



- 盆棚の飾り方の例**
- ① ほおずき・笹竹
 - ② だんご・そうめん
 - ③ 水の子（なすの賽の目）
 - ④ 蓮の葉に水
 - ⑤ きゅうりの馬
 - ⑥ なすの牛
 - ⑦ みそはぎ
 - ⑧ まいも・ごぼう

信徒の心得

- 一、私たちの宗旨は顕本法華宗です
- 一、顕本法華宗の総本山は京都の妙満寺です
- 一、私たちは日蓮大聖人が定められた大曼荼羅を御本尊として篤く仏・法・僧の三宝さまに帰依します
- 一、私たちは妙法蓮華経と日蓮大聖人の御書を教えの拠り所とします
- 一、私たちはお釈迦さまを教主と仰ぎ日蓮大聖人を宗祖日什大正師を開祖として経巻相承を宗是とします
- 一、私たちはお釈迦さまの大慈大悲を信じて努めて菩薩の行を实践します

目次

顕本法華宗管長 再任のご挨拶	2
春季報恩大法要 宗祖日蓮大聖人立正大師諡号宣下 100周年慶讃法要	3
「立正大師諡号宣下100周年」 を迎えて	6
聖訓カレンダー	9
ひとくち法話	12
おつとめのお経一語一話	13
ぶらり寺々を訪ねて	14
写して学ぼう 写経体験	16
住職からのまごころ一品	18
檀信徒のひろば	20
ケンポンクイズ	21
宗門だより	22
本山だより	23
暑中見舞い	24

顕本法華宗管長 再任のご挨拶

顕本法華宗管長 おおかわにちごう
総本山妙満寺貫首 **大川日仰**



南無妙法蓮華經

私儀、3月の顕本法華宗第77定期宗会に於いて、顕本法華宗管長および総本山妙満寺貫首に再任いたしました。もとよりその器ではありませんが、仏祖三宝諸尊へのご給仕につとめていく所存です。

ご承知の通り、本宗の宗章である「三つりんどうたちばな」の紋章は、僧員のお袈裟や紋幕などに使用されております。私たちはこの「三つりんどうたちばな」の紋章を持ち、日蓮大聖人の終生の願いである、国土に平和を！人々に安らぎを！を、一人ひとり心の中にある「信仰の小箱」にしつかりと納め、そして、本宗の僧員と檀信徒が力を合わせて、什祖留魂の地・総本山妙満寺をいただき、「経巻相承 直受法水（日蓮）」の御旗のもとに、正法顕本法華の教えを多くの人々に弘め伝えてまいります。管長、貫首再任にあたり、ご挨拶とさせていただきます。

合掌

令和4年

春季報恩大法要

宗祖日蓮大聖人立正大師諡号宣下100周年慶讃法要

5月21日（土）・22日（日）の両日にわたり、京都の総本山妙満寺において春季報恩大法要が奉行されました。

本年は、日蓮大聖人が立正大師の諡号を賜ってから100年の節目にあたり、立正大師諡号宣下100周年慶讃法要が併修されました。



また、昨年に続き、インターネットによるリアルタイム動画配信（リモート参拝）を活用し、大川日仰猊下大導師のもと、河野時巧宗務総長、土持栄孝本山総務、近末寺院僧員出仕により、厳粛に法要が執り行われました。

令和4年は立正大師諡号宣下100周年です。

法要



各座において慶讃文が
読まれました。



大川日仰猊下の御親教

法話

宗祖日蓮大聖人立正大師
諡号宣下100周年によせて



布教総監
秋葉敬真師



特命布教師
藤本智成師

権大僧正辞令伝達式



大阪府 茨木市 法華寺住職
奥村智学師



大阪府 堺市 妙満寺住職
青山靖史師

安珍清姫の鐘供養



本堂に常置された
釣鐘



切り火による厨子開帳



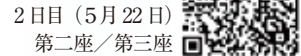
ご来賓の和歌山 道成寺 小野俊成様

春季報恩大法要
動画配信

当日の各座法要・法話の映像は、下記QRコードより視聴できます。また、総本山妙満寺ホームページからも視聴することができます。



1日目(5月21日)
第一座



2日目(5月22日)
第二座/第三座

* 映像が表示されない場合は、
Youtube 総本山妙満寺公式チャンネルからご視聴ください。

布教総監(会長)

秋葉敬真師(東京 法成寺住職)

特命布教師… 桑村信慶師(京都 法光寺住職)

特命布教師… 藤本智成師(岡山 本経寺住職)

特命布教師… 川崎英真師(千葉 龍教寺住職)

特命布教師… 吉本栄昶師(茨城 長照寺住職)

特命布教師… 秋葉妙琳師(東京 法成寺内)

特命布教師の各師は管長猊下名代として、総本山妙満寺の春季報恩大法要や、全国末寺において法話・講演をし、檀信徒の教化や、本宗僧員への布教の研修練磨及び実践の指導にもあたられます。

布教師会 各師紹介

令和4年3月付けにて、大川日仰管長より任命された布教師会各師は左記の方々です。

「立正大師諡号宣下100周年」を迎えて

第3回 本多日生上人の主義

宗務次長 千葉県 経胤寺住職 小松正学



本多日生猊下。
写真提供：本多日生記念財団

「立正大師」の諡号が宣下されることは、大聖人の多くの崇敬者や檀信徒の願いでありました。

宮内省からの正式な大師号宣下の通知状は、日蓮門下各派管長を代表して、顕本法華宗管長 本多日生上人宛てに送られました。当時の顕本法華宗が本多日生上人を中心にして、いかに広宣布教に活躍していたかがこの一事をみても推察できます。

当時の『時事新報』朝刊には、

〔前略〕他宗では今日まで大抵は大師号を賜っているが、日蓮聖人は生誕以来七百年にして初めてこのこと

があつたのであるから、津々浦々に至るまで信徒という信徒は感激に満ちていることだろう」と報じられています。

いよいよ宣下書拝受の大正11年10月13日、門下各宗管長八師は宮内省に参上し、代表本多日生上人が宣下書を拝受し、一同退下の後、本多上人は特に牧野伸顕宮内大臣より諡号宣下の聖旨について謹話を承り、その後一同は築地水交社にて奉戴式を行い、11月6日には上野自治会館にて「立正大師諡号宣下奉祝会」が挙行されました。

この奉祝会には、約2500人の日蓮門下僧俗が集結し、正面に日蓮大聖人の水鏡御影（肖像画）が奉掲され、また宣下書が奉安されました。

これに正対して日蓮門下各派管長が着座、その左右には各界の来賓や日蓮門下の名士らが着席し、陸軍戸山学校軍楽隊の奉楽の後、400名の日宗大学学生による慶讃歌、国柱会雅楽部の雅楽演奏に続いて、日蓮宗管長による発声にて法華経寿量品の読経と唱題、そして本多日生上人による『奉戴文』の奉読がされ、大変盛大で厳粛な式典が挙行されました。当時の新聞や資料を読みますと、大師号の宣下を僧俗共々に心から喜んでいたことが分かります。

さて、顕本法華宗の開祖日什大正師は、

「何事もたとえ日什記録に載せたる事なりとも、大聖人の御抄の本意に背くは本となすべからず」

「中絶の法水（正法の継承が途絶える）は大聖人の

御内証（心の内の悟り）より続きたてまつるべし。これすなわち経卷相承の二分なり」

といわれたことから、本宗は法華経と御書を基とする「経卷相承 直受法水」（お釈迦さまの教えを正しく經典を通して継承し、大聖人の教えや御書を素直に正しく解釈すること）を宗旨とします。

それゆえ本多上人は、法華経の立場から開祖の時代には伝わっていなかったキリスト教などの宗教や仏教を整理し、その結論的に導かれたものを標準として御遺文を再解釈されて講演・著述されました。

また「法華経は大綱を説き、細かい所に至っては他の経に譲つてある」と考えられて要望もあつたことから、法華経の立場より大蔵経（漢文に訳された仏教聖典集）を解釈した『大蔵経要義』（全11巻）をも出版されたのです。

以上のことにより導き出された結論は、本仏釈尊を中心とする信仰によつてのみ「本仏釈尊の救済が得ら

「立正大師諡号宣下100周年」を迎えて

れる」ということです。仏教は元来、三宝（仏・法・僧）に帰依することを信仰の基本としますが本多上人は、「法」とい僧というは畢竟（つまるごとく）仏の救いの手であつて三宝に帰依する中心を本仏に置くのが寿量品の思想である」

「仏が大慈悲を起さなければこの妙法五字の袋の中にこの珠は入らない」

「法華経は本仏を信ぜよということの記録である」

「自他妙合の力、すなわち向上する自己の力（自力）と、外から来たる絶対の力（他力・仏力）と合体して、その処に感応の妙（妙合）が生ずる」などと述べられて、本仏を信仰の中心に定められたのです。

（次号へ続く）

参考文献『心の宝』第162号（昭和57年）「立正大師号宣下六十年」

古瀬堅徳著



「立正大師諡号宣下100周年」を記念し、総本山妙満寺内宝物展示室にて、本多日生猊下ゆかりの品々が展示されています。



全国各寺院に配付されたパンフレット

聖訓カレンダー

解説

岡山県和気町 本成寺 早川義正

一身凡夫にて候えども

七月

口に南無妙法蓮華経と申せば
如来の使に似たり

四条金吾殿御返事

弘安二年（二二七九）大聖人五十八歳

このご遺文は日蓮大聖人が58歳の時に身延において、四条金吾氏への返書として書かれた書状です。

四条氏は、同僚の嫉妬による主君江間氏への数々の告げ口のため、一旦領地を召し上げられました。しかしその後、迫害に耐えて主君の信用を回復し、再び領地を取り戻すことができたことを、大聖人へ報告されました。

大聖人は、このことは「陰徳あれば陽報ありとはこれなり」と、主君に法華経を信じさせようとした四条氏の心の深さによるものであり、法華経への深き信心が導いた結果であると諭されます。

さらに、「法華経は根深く源遠し」と法華経のみが未来永劫に尽きることなく、その教えは弘まっていくと述べられます。そして、「自分自身はまだまだ

心未熟な身ではあるが、数々の法難に遭う中、一心にお題目を唱え続けてきたので、法華経を説かれたご本仏、お釈迦様の使いであることは確かである」と

明言され、最後に、法華経への信仰をつらぬく四条氏、また心を同じにする人々に対し、未来には必ずお釈迦様と同じ世界に住まいすることができると教え示されました。

八月

釈尊は孝養の人を
世尊となづけ給えり

曾谷殿御返事

弘安二年（二二七九）大聖人五十八歳

このご遺文は、日蓮大聖人が58歳の時に身延みのぶにおいて曾谷教信そやきょうしん氏の長子で、父の信仰を継いで大聖人へ帰依した曾谷道崇氏どうそうへ書かれたものです。焼米二俵が身延へ届けられたことへの感謝と、法門が説かれています。

冒頭に、油と燈明（油皿に油を入れ、油に芯を浸して火をともし）の関係を引用して三つの譬えをあげられます。

「尊い人の命を継ぐものは米である。譬えて言えば、米は油、人の命は燈である。また、法華経は燈、その教えを弘める行者は油、そして法華経の行者は燈、行者を援助し布施する信者は油、油なしに行者は布教できない」と説かれ、道崇氏のご供養、布施行になぞらえ、法華経弘通の大事を示されました。

また、輪陀王りんだおうの故事を引かれ

「輪陀王の白馬が白鳥をみて鳴き、その声を聞いて王は命をとりとめ元氣となる。その白馬の声は我々が唱える南無妙法蓮華経の声である。お題目の声を聞いて、諸天善神は必ず我ら同門を守護してください」と勇気づけられます。

最後に、身延での仏事供養への布施に対して「孝養の人、お釈迦様のような人」であると道崇氏を称えられました。

九月

天の三光に身をあたため
地の五穀に精神を養う

四思鈔

弘長二年（二二六二）大聖人四十一歳

このご遺文は日蓮大聖人が41歳の時に流罪地である、伊豆の伊東より、信者である工藤吉隆氏くどうよしたかへ宛てて書かれたものです。

大聖人はこのご遺文のなかで、「法華経の経文に示されるように、法華経を信じ、その教えを弘めたために迫害を受け流罪の身となった。だからこそ、昼夜間断なく、法華経を誦し修行することができ。人として生まれ、こ

れ以上の悦びはない」と、流罪地での心境をあかさされ、法華経の行者としての覚悟を示されました。

また、流罪にした国主と人々を恨むことなく、法華経を修行させた「恩深き人」とも述べられます。

また、今月のご聖訓では「天の三光（太陽と月と星）に身をあたため守られ、また地の五穀（米・麦・粟・豆・黍など）の

自然の恵みに命の源は養われている」と、天地の恵みへの感謝をつねに持つことの大切さを教え示されました。

我々法華経を信仰する者は、どんなに苦しい時でも、法華経の教主であるお釈迦様の大慈悲のなかにあります。真の法華経の行者である大聖人の御指南をたよりに、一心にお題目 南無妙法蓮華経を唱えましょう。